2022 年 3 月 31 日
公益社団法人日本介護福祉士会

「介護福祉士の処遇と職務に関するアンケート調査」報告

運営サポーター運営委員会
委員長　宮崎　則男

1. 方法

調査対象：323 名（1 月 13 日時点のサポーター登録者数 254 名、代議員 69 名）
調査方法：Google フォーム
調査期間：2021 年 12 月 28 日～1 月 13 日 18:00
有効回答：106 件（有効回答率 32.8%）

2. 主な結果

(1)　回答者の年齢と現在の介護従事状況

回答者の年齢は、40 歳代が最も多く 47 名（44.3%）、次いで 50 歳代が 40 名（37.7%）だった。回答者のうち、現在、介護に従事している者は 90 名（84.9%）だった。

表 1　年齢と介護従事者

	従事している	(%)	従事していない	(%)	計	(%)
20～29 歳	1	(1.1)	0	(0.0)	1	(0.9)
30～39 歳	7	(7.8)	0	(0.0)	7	(6.6)
40～49 歳	42	(46.7)	5	(31.3)	47	(44.3)
50～59 歳	32	(35.6)	8	(50.0)	40	(37.7)
60～69 歳	8	(8.9)	3	(18.8)	11	(10.4)
計	90	(100.0)	16	(100.0)	106	(100.0)
(%)	(84.9)		(15.1)		(100.0)	

(2)　介護業務の実務経験

回答者の介護業務の実務経験については、「20 年以上」52 名（49.1%）が最も多く、次いで「10～15 年未満」20 名（18.9%）だった。

表 2　介護業務の実務経験

	件数	(%)
1～ 3 年未満	2	(1.9)
3～ 5 年未満	2	(1.9)
5～10 年未満	14	(13.2)
10～15 年未満	20	(18.9)
15～20 年未満	16	(15.1)
20 年以上	52	(49.1)
計	106	(100.0)

(3)　勤務先の種類[注 1]

回答者の勤務先を「施設系」、「在宅系」、「病院」、「養成施設」、「その他」に分類した。「施設系」が最も多く 51 名（48.1%）、次いで「在宅系」37 名（34.9%）だった。

注 1：　【高齢】（地域密着型）介護老人福祉施設・特別養護老人ホーム、【高齢】介護老人保健施設・介護医療院、【高齢】養護老人ホーム・軽費老人ホーム・有料老人ホーム・サービス付き高齢者向け住宅、【障害】障害者支援施設を「施設系」、【高齢】認知症対応型共同生活介護、【高齢】訪問介護・訪問入浴介護、【高齢】通所介護、【高齢】居宅介護支援、【障害】居宅介護、【障害】重度訪問介護を「在宅系」、【医療】病院・診療所を「病院」とした（以下、同様）。

表 3　勤務先の種類

	件数	(%)
施設系	51	(48.1)
在宅系	37	(34.9)
病院	5	(4.7)
養成施設	5	(4.7)
その他	8	(7.5)
計	106	(100.0)

(4)　勤務先の法人種別

回答者の勤務先の法人種別については、「社会福祉法人」48 名（45.3%）が最も多く、次いで「株式会社、有限会社、合同会社等」29 名（27.4%）だった。

表 4　勤務先の法人種別

	件数	(%)
社会福祉法人	48	(45.3)
株式会社、有限会社、合同会社等	29	(27.4)
医療法人、病院・診療所を開設する法人及び個人	16	(15.1)
財団・社団法人、宗教法人、独立行政法人、NPO 法人	7	(6.6)
学校法人	4	(3.8)
その他	2	(1.9)
計	106	(100.0)

(5)　正規職員になるための条件

設問「あなたの勤務先では、介護福祉士の資格所持が正規職員になるための条件になっていますか」[注2]について、勤務先の種類[注3]と法人種別でクロス集計を行った。

注 2：　選択肢は、「必須条件になっている（介護福祉士資格を持っていないと正規職員になれない）」、「望ましい条件になっている（介護福祉士資格を持っていることが推奨されている）」、「採用の条件ではない」だった。

勤務先の種類別でみると、施設系は「採用の条件ではない」27 件（52.9%）、在宅系は「望ましい条件になっている」23 件（62.2%）、病院は「望ましい条件になっている」4 件（80.0%）、養成施設は「必須条件になっている」3 件（60.0%）が、それぞれ割合が高かった（表 5）。

法人種別でみると、社会福祉法人は「採用の条件ではない」21 件（43.8%）、株式会社等は「望ましい条件になっている」16 件(57.1%)、医療法人等は「望ましい条件になっている」8 件(50.0%)、学校法人は「必須条件になっている」4 件（100.0%）が、それぞれ割合が高かった（表 6）。

表 5　正規職員になるための条件（勤務先の種類別）

		必須条件	望ましい	条件ではない	計
施設系		9	15	**27**	51
	(%)	(17.6)	(29.4)	**(52.9)**	(100.0)
在宅系		1	**23**	13	37
	(%)	(2.7)	**(62.2)**	(35.1)	(100.0)
病院		1	**4**	0	5
	(%)	(20.0)	**(80.0)**	(0.0)	(100.0)
養成施設		**3**	0	2	5
	(%)	**(60.0)**	(0.0)	(40.0)	(100.0)
計		14	42	42	98
	(%)	(14.3)	(42.9)	(42.9)	(100.0)

注 3：勤務先の種類について、「その他」は除いた。以下、同様。

表 6　正規職員になるための条件（法人種別）

		必須条件	望ましい	条件ではない	計
社会福祉法人		9	18	**21**	48
	(%)	(18.8)	(37.5)	**(43.8)**	(100.0)
株式会社、有限会社、合同会社等		1	**16**	11	28
	(%)	(3.6)	**(57.1)**	(39.3)	(100.0)
医療法人、病院・診療所を開設する法人及び個人		2	**8**	6	16
	(%)	(12.5)	**(50.0)**	(37.5)	(100.0)
財団・社団法人、宗教法人、独立行政法人、NPO 法人		1	3	3	7
	(%)	(14.3)	(42.9)	(42.9)	(100.0)
学校法人		**4**	0	0	4
	(%)	**(100.0)**	(0.0)	(0.0)	(100.0)
計		17	45	41	103
	(%)	(16.5)	(43.7)	(39.8)	(100.0)

注 3：勤務先の法人種別について、「その他」は除いた。以下、同様。

(6)　昇進の条件や基準

設問「あなたの勤務先では、介護福祉士の資格の有無によって、昇進の条件や基準（施設長、管理者、介護課長、フロアリーダー等）に違いがありますか」について、勤務先の種類と法人種別でクロス集計を行った。

表 7　昇進の条件（勤務先の種類別）

		基準に違いがある	基準は同じである	わからない	計
施設系		**32**	15	3	50
	(%)	**(64.0)**	(30.0)	(6.0)	(100.0)
在宅系		**23**	11	3	37
	(%)	**(62.2)**	(29.7)	(8.1)	(100.0)
病院		**4**	1	0	5
	(%)	**(80.0)**	(20.0)	(0.0)	(100.0)
養成施設		2	1	2	5
	(%)	(40.0)	(20.0)	(40.0)	(100.0)
計		61	28	8	97
	(%)	(62.9)	(28.9)	(8.2)	(100.0)

勤務先の種類別でみると、施設系、在宅系、病院は、いずれも「基準に違いがある」の割合が高かった。勤務先 3 種類について「基準に違いがある」が占める割合を比較すると、病院（80.0%）が最も高く、次いで施設系（64.0%）が高かった（表 7）。

表 8　昇進の条件（法人種別）

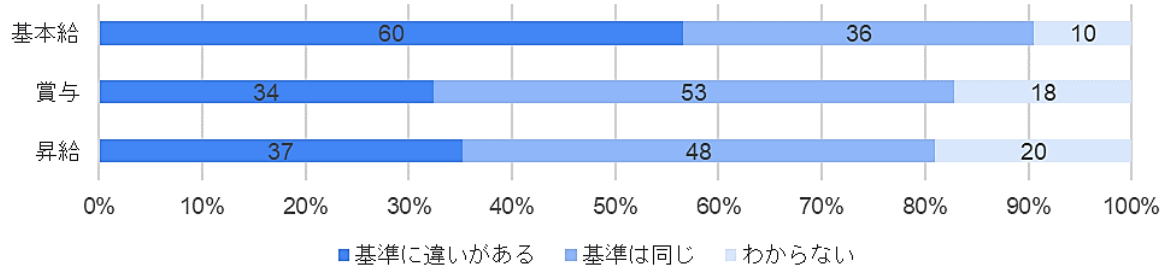
		基準に違いがある	基準は同じである	わからない	計
社会福祉法人		**27**	14	6	47
	(%)	**(57.4)**	(29.8)	(12.8)	(100.0)
株式会社、有限会社、合同会社等		**20**	9	0	29
	(%)	**(69.0)**	(31.0)	(0.0)	(100.0)
医療法人、病院・診療所を開設する法人及び個人		**12**	3	1	16
	(%)	**(75.0)**	(18.8)	(6.3)	(100.0)
財団・社団法人、宗教法人、独立行政法人、NPO 法人		**4**	3	0	7
	(%)	**(57.1)**	(42.9)	(0.0)	(100.0)
学校法人		**2**	1	1	4
	(%)	**(50.0)**	(25.0)	(25.0)	(100.0)
計		65	30	8	103
	(%)	(63.1)	(29.1)	(7.8)	(100.0)

法人種別でみると、いずれの法人も介護福祉士の資格の有無によって昇進の条件や基準について、「基準に違いがある」の割合が高かった。法人種別について「基準に違いがある」が占める割合を比較すると、「医療法人、病院・診療所を開設する法人及び個人」（75.0%）が最も高く、次いで「株式会社、有限会社、合同会社等」（69.0%）が高かった（表 8）。

(7)　基本給・賞与・昇給の基準

介護福祉士資格の有無によって、基本給・賞与・昇給の基準に違いがあるかについては、基本給は「基準に違いがある」60 件（56.6%）の割合が高く、賞与と昇給については「基準は同じ」がそれぞれ高かった（図 1）。

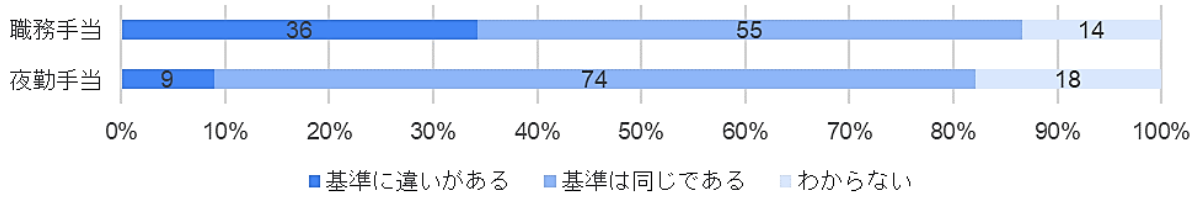
図1　介護福祉士資格の有無による基準の違い（基本給・賞与・昇給）



(8)　職務手当・夜勤手当の基準

介護福祉士資格の有無によって、職務手当・夜勤手当の基準に違いがあるかについては、いずれも「基準は同じ」の割合が高かった（図 2）。

図2　介護福祉士資格の有無による基準の違い（職務手当・夜勤手当）



(9) 介護福祉士資格の資格手当の設定方法

回答者の勤務先にある介護福祉士資格の資格手当の設定方法については、「介護福祉士取得の有無のみで設定されている」が 76 件（87.4%）と最も高かった。

表 9　介護福祉士資格の資格手当の設定方法

	件数	(%)
介護福祉士取得後の実務経験の内容を考慮して、段階的に設定されている	6	6.9
介護福祉士取得後の経験年数を考慮して、段階的に設定されている	5	5.7
介護福祉士取得の有無のみで設定されている	**76**	**87.4**
計	87	100.0

「介護福祉士取得の有無のみで設定されている」場合の手当の金額については、「5,000～10,000 円未満」30 件（46.9%）が最も多く、次いで「10,000～15,000 円未満」13 件（20.3%）だった。

平均値は 9,467 円、中央値は 5,000 円だった。

表 10　介護福祉士資格の資格手当額

	件数	(%)
～ 5,000 円未満	11	17.2
5,000～10,000 円未満	**30**	**46.9**
10,000～15,000 円未満	13	20.3
15,000～20,000 円未満	7	10.9
20,000 円以上	3	4.7
計	64	100.0

（10）処遇改善加算の算定

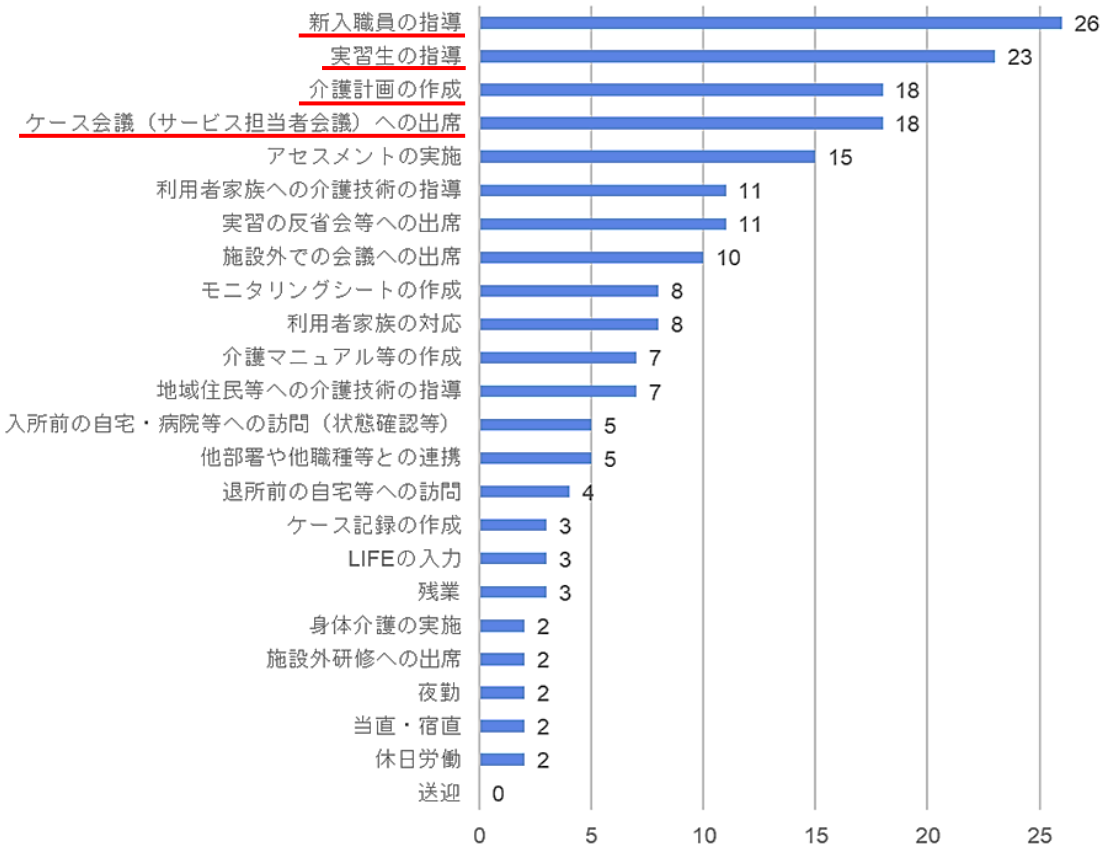
回答者の勤め先について、処遇改善加算の算定を「している」と回答したのは無回答を除く 105 件のうち 86 件（81.9%）だった。そのうち、キャリアパス要件の明記については、「明記されている」55 件（64.0%）が最も多く、次いで「わからない」18 件（20.9%）だった。

表 11　処遇改善加算の算定（キャリアパス要件の明記）

	件数	(%)
キャリアパス要件に明記されている	**55**	**64.0**
キャリアパス要件に明記されていない	13	15.1
わからない	18	20.9
計	86	100.0

（11）介護福祉士資格の所持が担当条件になっている業務

図3　介護福祉士資格所持が担当条件になっている業務（複数回答）



n=104（勤務先の法人種別について「その他」と回答した 2 件を除いた）

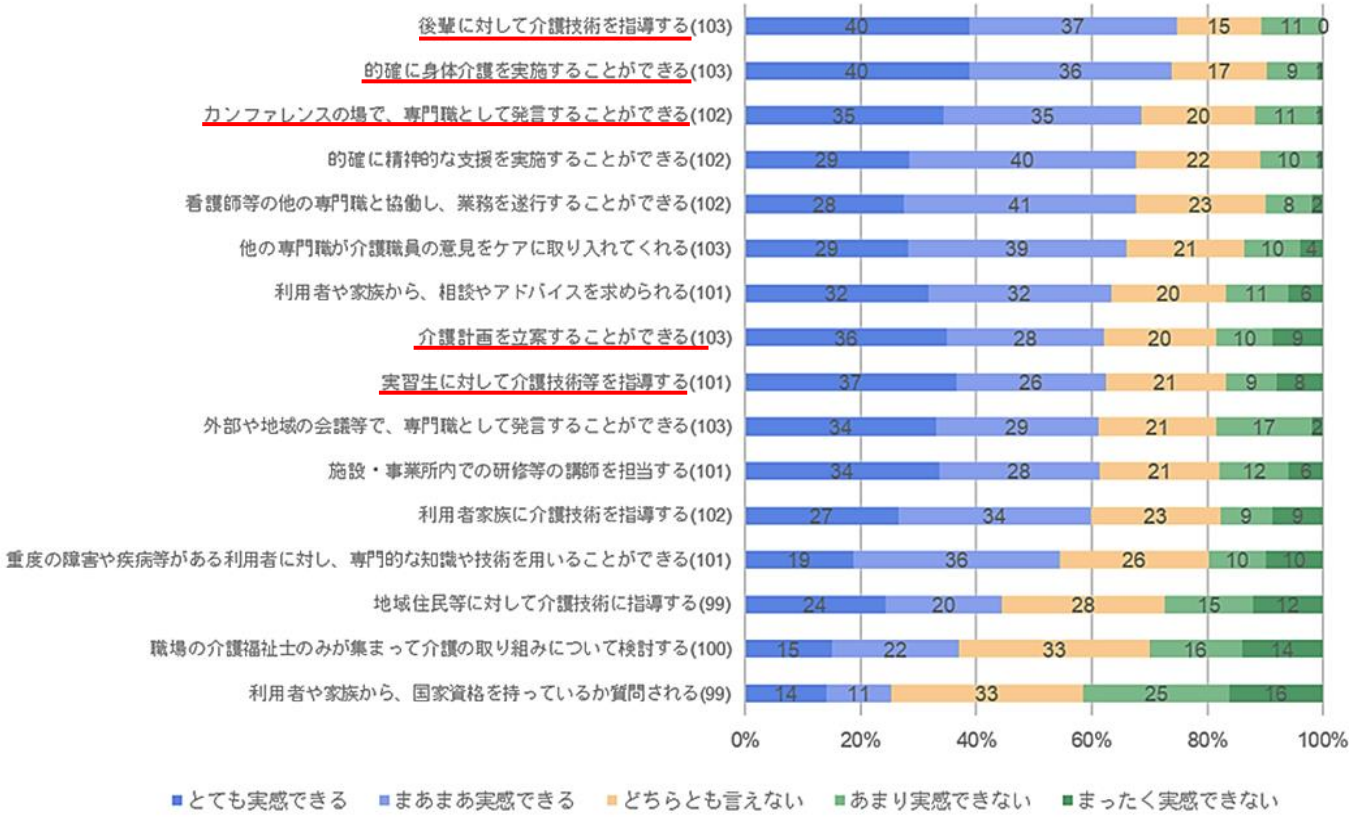
2022 年 3 月 31 日
公益社団法人日本介護福祉士会

介護福祉士資格を所持していることが、担当の条件となっている業務を複数回答で質問した。最も多かったのは「新入職員の指導」26 件（25.0%）、次いで「実習生の指導」23 件（22.1%）であり、後進育成に関わる内容だった。また、「介護計画の作成」18 件（17.3%）、「サービス会議（サービス担当者会議）への出席」18 件（17.3%）、「アセスメントの実施」15 件（14.4%）等、介護過程を中心とする業務も多かった。

（12）専門職（介護福祉士）であることを実感できる業務や状況

様々な業務内容や状況等において、専門職であること（介護福祉士であること）を実感しているかを質問した。「とても実感できる」の件数をみると、「後輩に対して介護技術を指導する」40 件（38.8%）、「的確に身体介護を実施することができる」40 件（38.8%）、「実習生に対して介護技術を指導する」37 件（36.6%）、「介護計画を立案することができる」36 件（35.0%）、「カンファレンスの場で、専門職として発言することができ」35 件（34.3%）等、後進の育成や介護の実践のほか、他職種と連携する場も多かった。

図4　専門職（介護福祉士）であることを実感できる業務や状況



（13）介護福祉士として実感を持てる業務や状況（自由記述回答）

介護福祉士として実感を持てる業務や状況として、得られた主な自由記述回答を内容ごとに分類し整理した。

【業務を通した実感】

① 利用者・家族とのかかわり

- 全ての職種の中で最も生活全部携わる為、信頼関係がどの職種とも桁違いに深い。その為さまざまな悩み等相談したりしてもらえ快適に生活してもらえる事。私の働いている施設では実際に家族さんが来所されることがあります。その時家族さんと話すのはほぼ介護福祉士だったり施設長だったりします。
- 利用者の心のケア。
- 利用者との信頼関係

② 他職種とのかかわり

- たまにドクターにも話をする機会があります。周りの人からは感謝されることがあるのでやってよかったと思うことがあります。地域包括支援センターやケアマネからの相談が多い。
- コロナ禍で医療介護連携の会議や、勉強会において、現場で実際対応している介護福祉士の意見を、求められる事が多くなり、他の介護職員と他職種との繋ぎ役としても、介護福祉士に対する期待を実感しています。
- 他の専門職との会議の中で、介護福祉士として介護に携わる者として、しっかりと根拠を伝えることができるのも、介護福祉士という国家資格を持ち、介護福祉士会にて研鑽できる環境がありがたい。
- 養成校で国家資格である介護福祉士の知識と技術を学んだからこそ、自信をもって要介護者やその家族への介護ができていた。多職種との関りについても臆することなく介護職からの意見を述べることができた。
- デイサービスで生活相談員が出来る
- 私は有料老人ホーム住宅型で勤務しています。CM と一緒にご利用者の入居有無の判定の為の面談に伺う事。
- また、業務の中で多職種(看護師)の方が介護福祉士の医療的ケアの範囲や業務内容を知っており、連携してスムーズに仕事を遂行出来たとき嬉しい。(多職種連携と言われて長いが、地域の中ではなかなかまだ難しい状態。顔見知りにはなるが、在宅系で信頼関係を作るのは結構困難に感じています。)

③ 教育・人材育成

- 介護福祉士会での講師・福祉系大学の非常勤講師等
- 介護教育、人材育成に関われること。
- 実習指導者としての活動。または実習巡回の非常勤など。
- 講師を行うときなどは自分も再度理解することができる
- 認知症サポーター養成講座や大学、高校の授業協力などで発信することが自身の介護に携わる体験、魅力、やりがい等も伝え、介護福祉士としての活動を誇りに思い実践しています。

④　地域住民からの相談の対応

・　介護保険以外にインフォーマルサポートとしての事業を展開しているので、地域住民に頼りにされている。

⑤　管理職やリーダーとしての対応

・　管理職として指導する際に実感がある。
・　チームリーダーとしての職責（業務）
・　認知症ケアについての会社や施設の方針決定ができる

⑥　専門職としての思考や言動の自覚

・　嫌なことがあると文句で終わりがちだが、先のとこも見越しながら話しができた時は、専門職だなと思える
・　認定介護福祉士へ向けての研修参加により日々考えながら業務遂行ができること
・　ケアマネージャーなのでピンチヒッターとして現場に入ることがありますが、その場面での入所者の様子や職員の対応の気付きなどケアの質について指摘ができる。
・　次世代介護機器の使用方法の熟知など

⑦　業務を通した専門職としての評価

・　業務的にはあまり実感は現場では感じないが、法人の賃金などの違いから専門資格保持している事を実感する。
・　実地指導の際、介護福祉士の配置数と事業所体制条件の質について評価をもらった時

【業務外での実感】

⑧　職場外・業務外の場面で専門職としての活動

・　介護福祉士会の研修で教えて頂いたので、普段は街中でケアを必要とする方に声をかけて対応したとき。また、災害支援の活動に携わったとき。
・　介護認定審査会への推薦

⑨　プライベートな関係や介護関係者ではない人からの評価・認知

・　労務管理、人事において、介護福祉士なのか否かでの判断の際に、資格者だからと、励まされる。感謝です。利用者からも、可愛がられる。自己の家族や叔父叔母、とかから、〇〇ちやんが、介護福祉士及び認知症ケア専門士の資格者なのは、良かったと、嬉しがられた。
・　介護関係者ではない人から、施設の外で「介護福祉士さんって、介護士さんとは違うのよね。」という話をされた時に嬉しかった。
・　卒業した学校同窓会への参加や交流は、教育現場からの福祉を感じとることができたこと。

⑩　介護福祉士会の活動や専門職種間の交流

・　老人保健施設協会の多職種との研修や、介護福祉士会の大会や総会、日本ホスピス在宅ケア研究会の大会､Zoom での認知症カフェなどの参加時に､介護福祉士としての実感を持ちました。
・　私はオンラインでのイベントや、研修に参加したり、外部で障害者などのボランティアをしています。ボランティア先では介護福祉士であることで介護の仕事について色々聞いてきます。また、オンラインイベントでは「介護福祉士」と名前の横に表示することで同じ資格を持つ方と「介護福祉士」の目線で色々聞いてきます。その時に「この資格を持っていて良かった」と

実感しています。

- 介護・福祉以外の専門外には弱いという視点を常に実感している。だからこそ、他の専門職との連携や情報収集、役割別での依頼や対応、インフォーマルの活用や行政が絡む手帳や助成や年金や手帳等々、介護福祉士ならではの苦手な部分を補えるよう、日々個々で必要な対応と判断をしている
- 職能団体の活動が高く評価されている
- 介護福祉士会の活動に参加しているとき

【実感はない】

⑪ 勤務先には求められていない（勤務先の種別や利用者の状態による）

- 有料老人ホームでの訪問介護業務で利用者と関わるが、医療を主に必要な方が多く入居されているので訪問看護がサービス提供の主軸となっており、介護福祉士として専門的なことは、会社には求められていない。転職して以来、介護福祉士としての誇りやプライドを実感することはなくなった。仕事として、多職種連携はしっかり持つように心がけているが、看護師の意見が重視されるため、現実的な多職種連携は難しいと実感している。
- 職場、法人により、介護福祉士有資格者と無資格者との、格差や優遇等の違いが大きく有ると、現職場で感じている。フルに業務にあたれる職員が、常軌となっており、無資格の入職の古い人が、優遇と発言力を持って居る組織な為、介護福祉士としての実感はない。医療法人では、資格、研修参加等で、評価はあった。
- 職場での業務や状況は、有資格者も無資格者も全く同じ。現状として、有資格者として、実感を持つ事が出来ず、残念。
- 基本的に無資格者も同じ業務を担当しているので、格差をつけていないです。